釣れ釣れなるままに

２００６年思い出の釣行記 PART.　１

弁天様の御利益は

鹿島釣狂

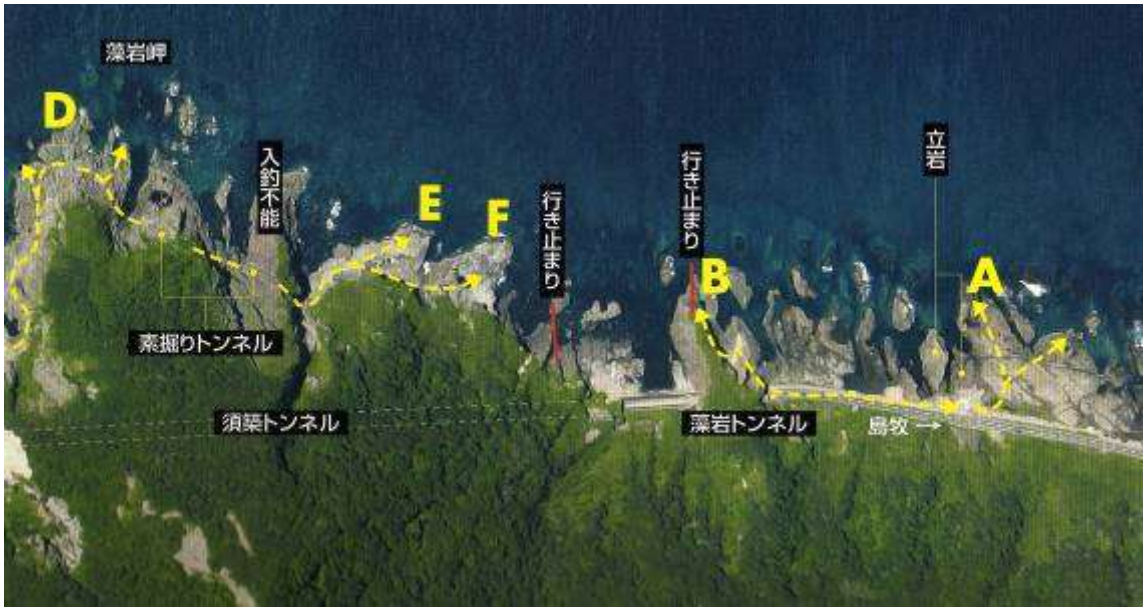
☆開 催 日	平成１８年４月２３日		
☆開催場所	須築港～梅花都		
☆入釣場所	須築海岸（藻岩トンネル北口前の平盤）		
☆釣　　果	アブラコ	３２５　㎜	２／３
	ホッケ	３４７　㎜	３／１０
	重　量	１７８　０ｇ	
☆成　　績	合計点数	８５０　点	
	成績	７　位	
	累計点	７　点（⑦）	

弁天トンネル前

女房が澄み切った青空を見上げながら「嵐にならなければよいのですが」と怪訝な顔をしてみせる。怠け者の私が珍しくも４月に入ってすぐに夏タイヤに取り替えたのだ。そしてその翌日は、彼女の予想通りの大雪となった。その後も氷点下の寒い日が続いたので海水温が上がらず、魚の活性も低いことと推測される。さらに、沖でアカアミが大量発生しているので魚の岸寄りも遅れているという情報がまことしやかに流れてくる。磯で時たま釣れるホッケはアカアミ色に染まっているということだが・・・。

今回の大会では、昨年から開発していたソイの引き釣り仕掛けを使ってみたい。五十嵐明氏のソイの引き釣り仕掛けが「北海道のつり」に掲載された。磯波の状況に合わせてオモリにしているブラーの大きさ変えることが出来るようになっている。私は根掛かり防止のために極力出っ張りをなくすようにと天秤の中間に中通しオモリを通し、天秤の先が浮き上がるようにとシャケフロートを付けてみた。これは雄冬海岸で何度も試釣しながら改良を加え、ある程度の手応えを感じることができるようになったものである。オモリの大きさを変えることが出来るようにと更に改善する必要がありそうだが間に合わなかった。

この範囲の大会では島歌川の平磯に入り、１位、３位、２位と連続してよい実績を収めた。この磯は、大きなゴロタ石が沖まで張り出している所なので、引き釣りは無理である。ソイの実績があるドン深の藻岩岬先端は、崖崩れのために侵入禁止の措置がとられているという。そこで、須築海岸弁天トンネルから藻岩トンネル付近に釣り場を決定した。この辺りは海藻がほとんど付いておらず、カジカやアブラコなどの根物は難しいということなのでホッケとソイを狙っての釣りとなる。



半年ぶりに釣遊会仲間を乗せたバスが颯爽と瀬棚海岸に向けて出発した。例のごとく釣り場の情報が飛び交うが、最近では切梶や梅花都付近が有望であるらしい。各自、慣れ親しんだ思い思いの釣り場に向かうようで、須築海岸で下りる者はいない。初めての釣り場で仲間もおらず不安が募るが、ソイを釣ろうとする意気込みだけは変わらない。意を決して弁天トンネルを抜けたところでバスから降りた。身支度のための釣りバス２台を須築漁港で追い抜いたためか、磯にはギョギョライトの光が一つも見えなかった。

少し歩いてガードレールが切れたところにガラ場の駐車帯があったので、そこから下りてみる。平盤はゴツゴツした岩が細かくささくれ立ち、重い荷物を担いでいるために足裏が痛い。また、右肩から腕にかけての古傷がズキズキと痛む。

気功で魚を惑わす

地下に溜まった水を汲み上げるためのポンプが故障し、地下が雪融け水で水浸しになってしまった。そのため、携帯用水中ポンプを職場から借りて運んだのだが、それが結構重い。持ち上げた時に背中の筋を痛めたらしい。当初は寝返りもうてないほどだったが、我慢しているうちに自然に痛みも取れるだろうと放っておいた。しかし、痛みの場所が背中から肩へ、肩から腕へと移動していくだけで、じっとしていても指先までジンジンと痺れている状態である。

以前、仕事上のお付き合いのある方から、「痛いところはないか。楽にしてやるぞ」と尋ねられたので、その好意を無碍（むげ）にもできず、「腰の調子が悪い」と申し出たところ、腰に手を翳（かざ）していただいた。すると、腰の辺りがじわじわと温かくなり暫くそのままの状態を続けていると、腰が軽くなったように感じられた。彼は、趣味でヨガをやっていたら自然に気功が身に付いたというのである。更に続けて、次のような説教を始めた。

「西洋医学では病気を薬で治すが、薬は人の治癒力を奪ってしまう。熱が出て体温が高く

なるというのはその病魔と闘っている証拠である。薬の力で熱を下げてしまっては、その闘いを放棄すること、つまり人間に備わった自然治癒力を奪ってしまうことになる。東洋医学では、病気を退治しようとする人に本来備わった力を信じる。そしてその手助けだけをし、治癒力を向上させる。」更に話は「輪廻転生」「宇宙の力」「人生論」と続いた。それが病院にも行かずに放っておいた理由ではなく、ただ単に面倒くさかっただけなのだが・・・。

あるテレビのドキュメンタリー番組で「気功」を取り扱っていた。気功師なる者が出て来て、野生動物園で車の中から手を扇ぐような動作をする。バタバタと扇ぐのではなく、気を送るようにゆっくりと手を振る。すると、放し飼いにされたバイソンが一頭また一頭と崩れるように倒れていく。そして、気持ちよさそうに眠りにつくのである。

また、同じ気功師が今度は医者から見放されていたガン患者の患部に手を翳した。すると、今までレントゲンに写っていたガンの病巣がみるみる小さくなり、完全に治癒してしまったのである。さらに、念を入れて、衝立(ついたて)を挟んで司会者を立たせ、気の力で体を突き飛ばしてしまう光景を映像として見せられた。

私は、超能力や心霊現象、幽霊などのオカルト的なことは信じない。なにか必ずトリックが隠されているのだと考えている。しかし、今回の自分自身の体験で「気」の存在については信じてみたい気もしている。**海に気功を送って魚を惑わすことができれば・・・。**

水遁(すいとん)の術

肩から腕にかけての痛みと、足裏の痛みに耐えながら、狙いとしていた盤（A）に上がった。すっかり有頂天になり、本日の釣行が楽しみに思えてくる。しかし、初っ端からその意気込みを挫(くじ)かれてしまうことになった。

貴誌で紹介されていた湾洞（Aの左）に向けてイカゴロ仕掛けをチョイ投げした（つもり）。９時方向の立岩前の溝に向かってネット仕掛けを中投した（つもり）。正面沖に向かって２本バリ仕掛けを遠投した（つもり）。そして、タバコを一服し、ワンカップの滴を海に注ぐという恒例の儀式を行った。

間もなく、釣り人２名が近づいてきて、私の手前から方向を変え、私が仕掛けを投入した（つもり）湾洞の海面上を水遁(すいとん)の術を使って忍者のように進んでいく。そして、何事もなかったかのようにその海面上で竿をセットし始めたのだ。実は海面だと思ったところは岩盤の上だったのである。私が乗った岩の前の溝を挟んで湾洞に面したもう一つの出岬があったのだ。後からの二人と同じように縦溝の狭くなった所を通り、岩の上に乗ったチョイ投げのイカゴロ仕掛けを回収した。中投したネット仕掛けは海の中ではあるが、二人の手前、竿を移動して引っ張り上げるわけにはいかず、こっそり手で手繰り寄せて撤収した。

そして、もう一度、自分の入ったところを地図で確認してみた。湾洞に面した狙いの場所ではなく、更にもう１本溝を挟んだ細長い出岬だったのだ。「その狭い溝では、稀にソイやカジカが上がることがあるが、一投一投根掛かりする」と紹介されていた。なんだか一気に戦意が喪失し、他に移動する気も失せて、あらためて、３本の仕掛けを正面に向けて

投入し直した。
　何度も打ち返すが、ピクリとも音沙汰がない。釣果がないと様々なことを考える。須築漁港方向に移動するか？ウキ釣りを用意するか？こんな時こそソイの引き釣りを試してみよう！
　まずはソイの引き釣りができる所を捜して付近を探索する。海岸線が入り組んでおり、結構な高さの岩もあって見通しがきかない。その岩影にギョギョライトが見え隠れしているが立ち寄ることを躊躇するほどの急勾配だ。空を見上げると所々に星々が瞬いているのだが、月明かりが全く無い。ようやく辿り着いたときには２名が陣取り盛んに竿を振っていた。その横の溝にも１名がいたが、釣果はまだないようだ。そして、弁天トンネル南口の湾洞出岬に釣り人２名がおり、バッカンを覗かしてもらうと小さいながらもホッケとソイが収まっていた。
　自分の所に戻る途中で、湾洞の根元にウキ釣り師がいた。夕方に大釣りし、また明け方のホッケの寄りを期待して待っているという。私が狙いとしていた所に入った御仁にも尋ねるが、「今来たばかりだが、チビソイとホッケが来た」と言う。今来たばかりなのは分かっているが、何某かの釣り物があったとなると、その横にいる私にも何か来るだろうと釣り場に戻る。
　エサを取り替え打ち直してからソイの引き釣りを試みる。イカゴロを付けて袋が破れないようにと慎重に投げ入れ、底近くを静かに引く。根掛かりはなく、イカゴロ１本につき３、４度引くことが出来る。しかし、イカゴロ２０本程使ったがピクリとも反応しない。
　遠投していた置き竿がバタバタと揺れて、ホッケがようやく釣れた。同じ所に打ち直すとすぐにアブラコが来た。更に引き釣りも併用しながら続けたが置き竿の方にアタリが出るのでソイの引き釣りは諦めてしまった。

一投に希望を託す

　遠投は根掛かりする。投げてからすぐに道糸を張っていると、鉛がコトンと海底に落ちたのを感じる。海藻が無いのだ。カジカがほしい。ホッケも大物が・・・。
　いつかは来る、必ず大物が来てくれると信じて打つ。果てしなく広がる海原に向かって打ち込んでいる限り、その可能性はあるのだと信じて打つ。
　「希望は人を導く信仰である。希望がなければ何事も成就するものではない」
　自ら盲・聾・唖の三重苦を背負いながら、一生を世界中の心身障害者の救済にささげたヘレン・ケラーの言葉である。どんな困難にあっても希望を抱き、打ち勝とうとする強い意志力を持つことが希望の成就につながっていくものである。人は夢や希望があるから頑張れる。その夢や希望が叶うのを見通せない時に人は得てして諦めてしまうことが多いものだ。そして諦めてしまった時に、その可能性までも葬り去ってしまうのだ。一投一投に必ず希望を込める。すると、不思議なことに辛いことも乗り越えることが出来るのだ。最終的には裏切られることもあるが、人生とはそんなものであると達観して新たな一投に希

望を込めるのだ。

空が薄明るくなってきた。立岩側の湾洞で、ウキ釣り師が所狭しと並んでいる。そして、次から次へと間断なくホッケを上げている。明け方になって５本揃わなければ、ウキ釣りをしなければならないのかと観念しながらもブッコミの竿先に集中する。見事なアタリが出て大物を連想するが、それが２０㎝に満たないハチガラだったりする。ズシリとした重みでカジカを連想するが、それが特大のヒトデだったりする。ドキリ、ドキリとした合間にチビホッケがポツン、ポツンと来て、何とか審査規定の魚は揃った。今日はこんなものだろう。

１０時前に国道に上がった。先に札幌北支部（札幌親鱗会）の方々がバス待ちをしている。その中に女性釣り師がいた。背中の彫り物を見ると「３ちゃん」とある。人懐っこい眼差しであいさつをしてくれる。美釣会の遠藤美由紀さんが立岩の奥から大きな荷物を背負って上がってきた。藻岩トンネル裏（尖った立岩の更に奥）の奥でやっていたようだが、バッカンを開けて獲物を見せてくれた。中にアブラコ４５㎝級他、大物クロガシラやホッケがびっしりと詰まっていた。噂に違わずさすがの釣り師である。

この弁天トンネル付近には、もう２度と下りることはないだろうと思いながらも辺りの風景をデジカメに収めてからバスに乗り込んだ。

審査結果

優　勝	嵐　光博	１１０３点	（アブラコ４００㎜+ホッケ　３６５㎜+３３８０ｇ）	中　歌
準優勝	安曽和夫	１００５点	（ホッケ　４１０㎜+アブラコ３４３㎜+２５２０ｇ）	上美谷
３　位	吉井　博	１００２点	（ホッケ　３７３㎜+カジカ　３６１㎜+２６８０ｇ）	中　歌
４　位	前野達志	９６８点	（ホッケ　３８８㎜+アブラコ３５２㎜+２２８０ｇ）	中　歌
５　位	堀内正博	９３６点	（ホッケ　３８５㎜+アブラコ３１９㎜+２３２０ｇ）	吹　込
身長優勝	安曽和夫	４１，０㎝	（ホッケ）	上美谷

【つれづれ】

入釣場所はウキ釣り師が見える盤のさらに右の盤である。一番奥のウキ釣り師がいるところが入釣予定だったのだが・・・。そして、ウキ釣り師がいる盤にチョイ投げの第１投の仕掛けが乗っていた。

砂利原の上にコンクリートを流したような斜面を上っていく。そのコンクリートの下にあるはずの砂利が流れ落ちて空洞になっていた。入釣時はいつ崩れ落ちるか分からないような所を歩いていたことになる。